

新着堆肥



石割京大農園
Ishiwari Kyoto-univ. Farm



ときどき、農家さんから「どの堆肥がいいですか？」と聞かれます。昨年、京都府下の「鶏糞堆肥」を全部、集めてみましたが、生糞を乾燥しただけのものから放置しすぎてまるで砂みみたいなものまで千差万別でした。どの堆肥が良いか、その判断は、土壌を改良したい、とか、作物に栄養素を補いたい、とか、使う側の目的によって変わります。一方、堆肥を製造する側なら、生ゴミや家畜糞を、如何に素速く、臭い少なく、安価に処理するか、が重要になります。

昨年暮れ、工場見学に伺った時にいただいたこの共和化工社製堆肥、下水汚泥を通気しつつ発酵が90℃以上で進行するようにして作られた堆肥だそうです。濃い茶色でほとんど土のような感触です(↓)。堆肥として見ると、施用されたのちに土壤中で分解されるべき有機物が製造中に分解されてしまっている、悪い例として挙げられる『焼けた堆肥』ですが、大量の汚泥を処理しなくてはならない側にすれば、嵩が大幅に減って乾燥でき、しかも滅菌もできる、とても優秀な「堆肥」でしょう。



この堆肥に見合った使い方を見つけ出すことが肝要です。堆肥そのものはただの資材、それぞれの特徴を見極めて、最もフィットする目的に使えば、どの堆肥も優れた資材になる、とはたくさんの堆肥を分析して思うところですが、まあ、撒くだけで甘くて柔らかい実が山ほどできる…ような堆肥はない、とまず知ることでしょう。稲わらや牛糞堆肥などを毎年、施用してきた石割京大農園も、マサ土のガサガサな黄色い圃場がやっと黒っぽくしとりとしてきました。